

(1) 東京驛前に聳立した海上ビル新館の正面全景(大手町寄)

經濟を主眼とし合理的に施工された 東京海上火災新館の建築に就て

東京海上火災保險營繕課 飯 田 技 師

—工事概要—

起工 大正15年2月1日。
落成 昭和5年2月1日(大體)
工費 約500萬圓。
所在 東京市麴町區丸の内1丁目6番地
階數 地下室共8階建。
建坪 1150坪。
延坪 9700坪。
構造 鐵骨鐵筋コンクリート造。
基礎 杭打地形(米松55尺)柱毎獨立地形とす
外部仕上 3階以上萬成花崗石水磨仕上。其他
は米國製「テラカッタ」及人造石仕上とす。
内部仕上 1階商店街其他主要部の壁體は「イ

タリー」産大理石張、其他は「タイル」張
及漆喰塗仕上とす。
設備 客用昇降機6臺、「オーチス」製(速力1分
間400呎)荷物用昇降機1臺(日本エレベ
ーター會社製)
煖房 「ボイラー」は「ガルベ式」高壓蒸汽用
2基。各煖房室は「ペーパーシステム」を採
用す。
鑿泉 深さ220尺「エヤーリフト」に依り、一晝
夜10000石、揚水、雜用に充つ。
給湯 各階洗面所に供給す。
空氣洗滌 井水を使用し洗滌機に依り空氣を
洗滌す。

換氣 屋上換氣ダクトを通じ地下室全體に送氣す。

冷凍 各厨房毎に「フリック」會社製冷凍機を使用す。

郵便局 カットラー會社製品双筒1基。

シャッター 側通り全體に設け、その揚げ降しは電動機の裝置に依る。

側窓採光 紫外光線透射の効率多き「ウビオルガラス」を採用す。

設計 會稱中將事務所。

設計監督 大下豊治氏、清水安之進氏。

○

第一海上ビルが出来たのは大正六年で當時に於けるビル建築の先驅だつた。第一海上ビルが出来たのが昭和五年、この十二年は東京をして立體都市たらしめた。その列中に聳立した第二海上ビルも亦一先驅の事實がある。それは工事の組織、施工の方法にある。本工事が如何に經濟的に能率的に造られたか、構造的にも施工上にも此建築は確かに資本主義的理想を具現したものと云つて好い。

本建築は東京海上火災保險株式會社の直營

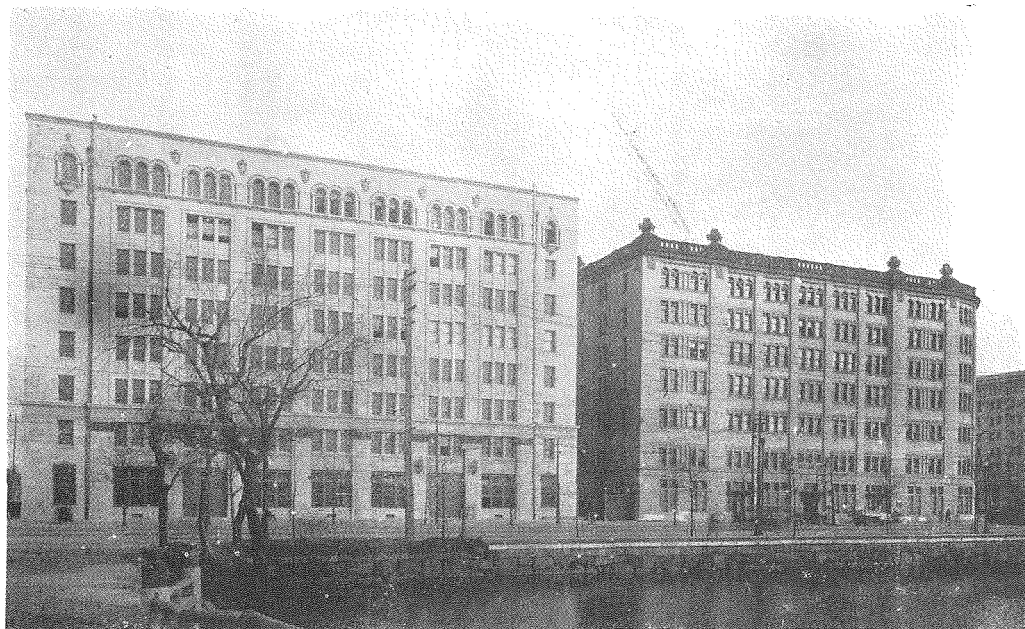
工事である。その材料購入方法は、例を挙げると、テラカッターは桑港のグラツデンマクビンから、鐵骨は八幡製鐵所から、何れも直接交渉した上、夫々加島組三菱商事を通じて購入した。

請負者は清水組(東半分)と松尾組(南半分)に各關東關西對抗競技にやらせた。競技は必然に最能率を挙げしむる、最も能率の急所を掴んだやり方であつたが、何分關東關西との地理的氣風の相違やら、あの道特有の氣分等があつて、その統制には少からぬ不安があり、監督員の努力も並々ではなかつた。

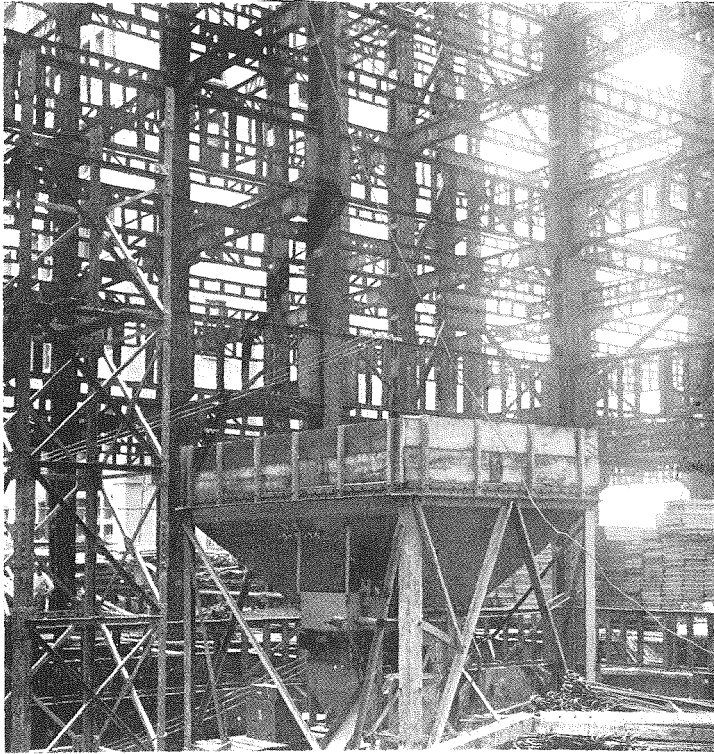
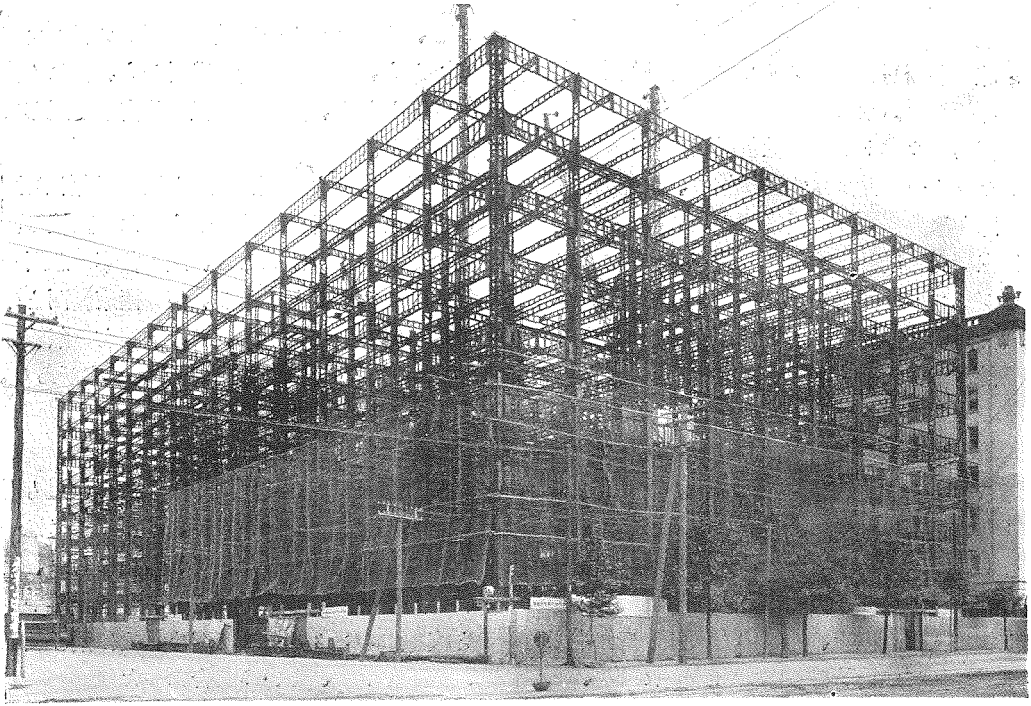
——混凝土工事に就て——

第一海上ビルとの距離は僅か四間、而も同ビルには地下階が無いので、基礎工事には一方ならぬ心配があつた、で、壺掘にした、それも連続的にやらないで、一ヶ所壺掘をやると直ちにコンクリートで固め、次は飛び放れた方面をやる、といふ具合だつた。

コンクリート工事には、十六キロのミキサ一二臺に適用させるためにインデーターを東京商業貿易から買つて据え付けた。



(2) お濠端から見たる海上ビル新館と舊館(向つて右)

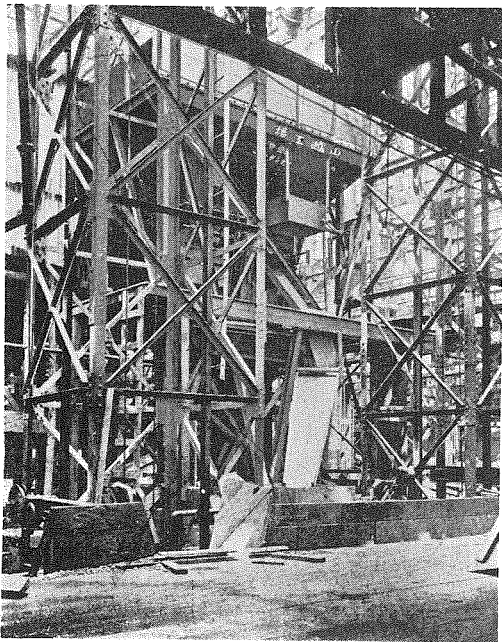


- (3) 海上ビル新館鐵骨組立完了の景(上)
- (4) 同イナンデーターを据付け混凝土工事に着手せんとする處(下)

イナンデーターは、元來、水と砂とセメントを適度に飽和するための機械であるが、その練り具合は確かによく、うまく均一される然しそれには相當の人の手が掛る、尤も本工事には茨城縣久慈川のアラい砂をつかつたせいもあるが、始終工夫が網を揺すぶり、少しづつ砂を落とし込まなくてはならない、ところが工夫は勞を省くために、一度にドツと砂をぶち込む、それをさせないために監督をする必要がある。

この點はイナンデーターの改良を要する點だと思ふ。砂を一度に落とし込んでも、うまく覺伴され、適度に飽和されるやうな程度にまで改良されたいと、考へる。

本工事には高爐セメントを多量に使つた(3萬樽、金鈴商會供給)同セメントに對しては、『鐵を錆びさせる』等の非難があつたが、これは帝大應用科教室で試験の結果、決してさうした點は無い、と證明され、本工事に實地使用の上、該非難は全く一片の噂に過ぎないことが解つた。



(5) イナンデーターを使用して工事施行中の景



(6) 新館正面入口

——建築に就ての特徴——

本建築に就ての特徴、とでもいふべき箇所を列挙すると

煖房装置 ガルベ機罐が設備されてゐる、これは焚炭で、完全燃焼、眞の無煤煙である。

附帯設備 本建築は貸事務所を大半の目的として建てられたのだが、その附帯設備は自家と同じやうに微細な點まで完備してゐる。一例を挙げると、便所の洗面器にはサンドライ即ち布巾を用ひずして、濡手を乾かす器具などが据付けてあること。

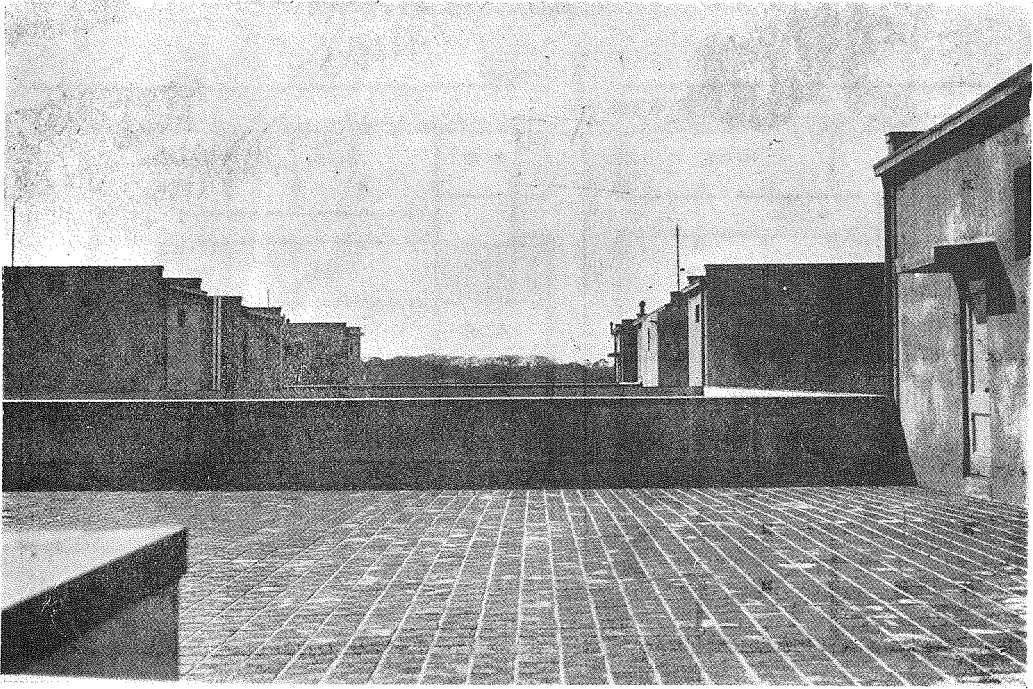
採光 ビル内何れの室も明るく、毫も無明不自由を感じないこと。

窓硝子 獨逸ウピオル會社製の硝子が使用してある、この硝子は紫外光線を室内に吸収する特能を持つ、高價であるが、人間の健康保持を第一義として、高價を顧みなかつた。

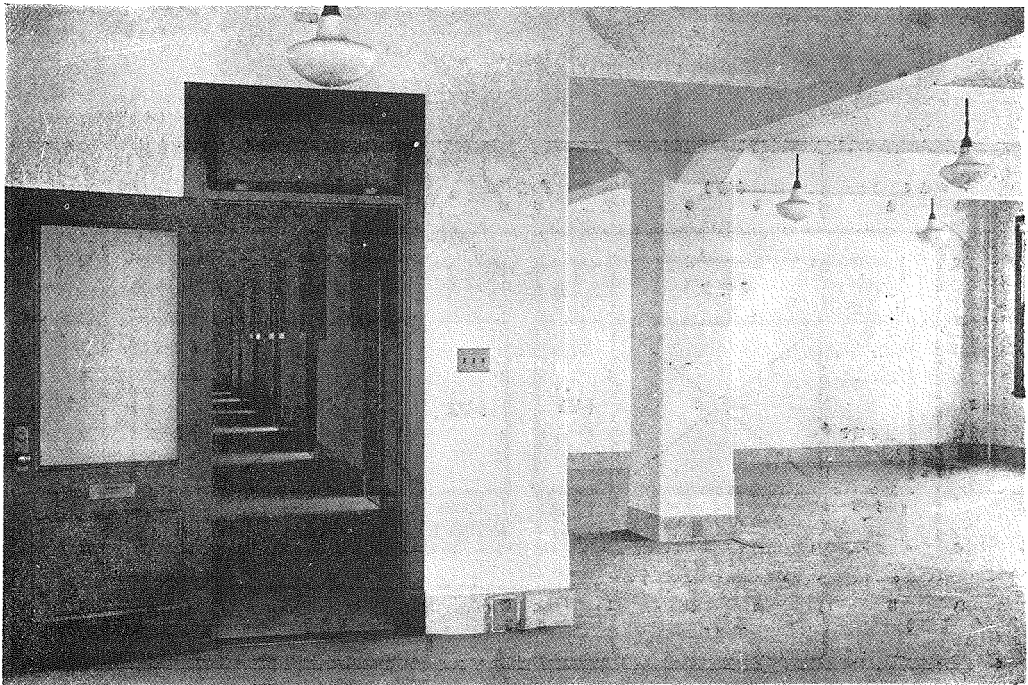
エレベーター オーチスのものだが、殊に精巧で、多少運轉未熟の結果フロア到着の際、カーとフロアとの高低の差があつても、自動的に旨くレベルを平衡にする装置がある。



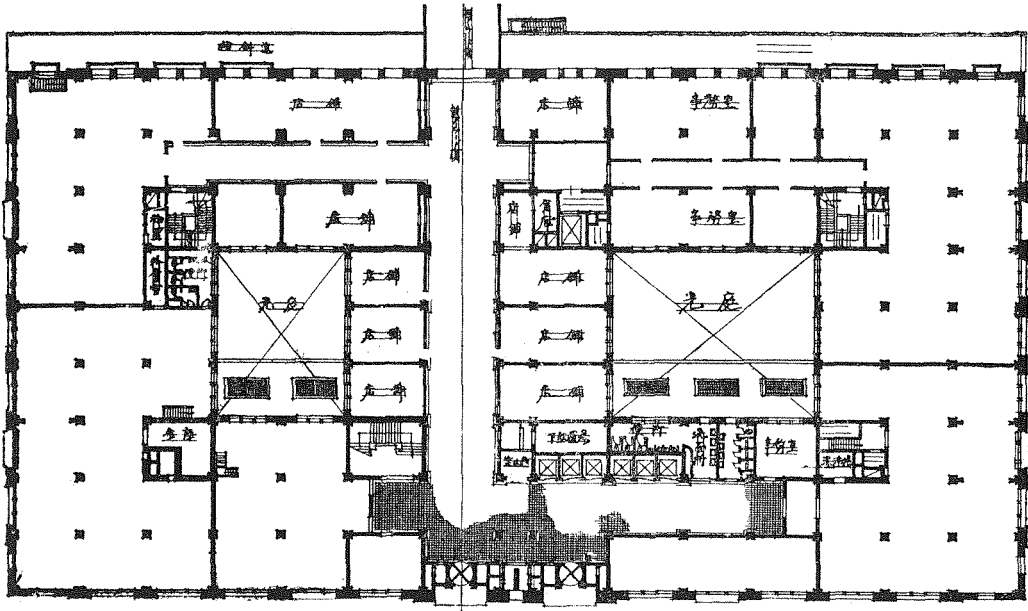
(7) 海上ビル新館一階廣間



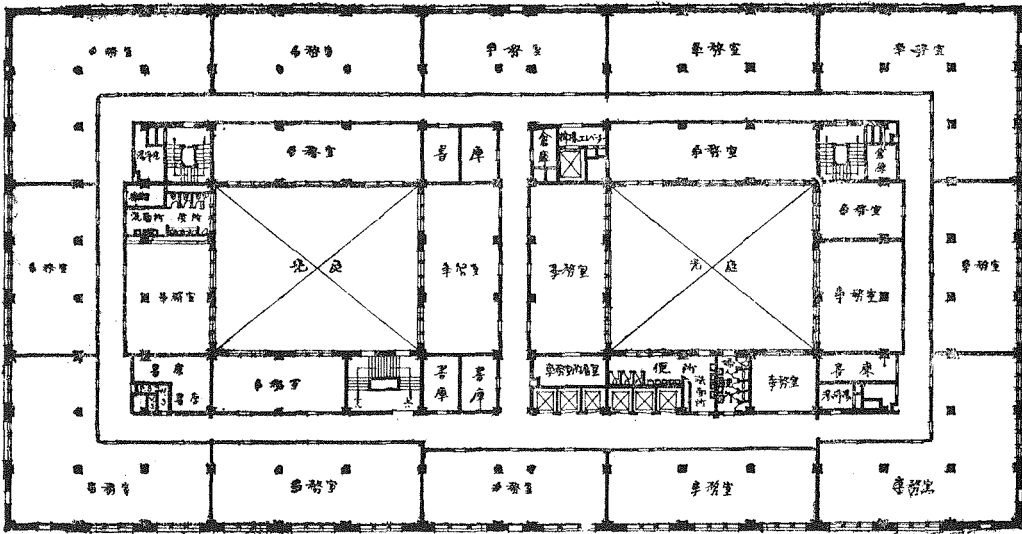
(8) 海上ビル新館の屋上。中央が光庭、並列してゐるのは昇降機室換氣室その他



(9) 明るく氣持をよく設計された新館の内部



(10) 東京海上火災新館一階平面圖



(11) 同上貳階以上七階の平面圖